



印伝がさらに多くの人に愛好されるようになったのは、明治以来、印伝の信玄袋や巾着袋が広く普及してからだ。やがて近代には、ハンドバッグが生産され女性たちに入気を博し、次第に製品も多様化。「甲州印伝」は山梨を代表する特産品の一つとなった。



印伝の歴史・産業を後世に伝えていくことが、私たちの責任と語る甲府印伝商工業協同組合 事務局長 上原重樹さん

## 多くの女性に愛される「伝統的工芸品」に

そして、伝統を受け継ぎながら現代にも通用する印伝にするため日々、積み重ねてきた努力が実り、今や「伝統的な美しさ」が、国内だけでなく、「INDEN」として世界中で評価される時代になった。

伝統と技術のみに依存していたならば、現在の印伝は工芸品として評価を受けなかつたろう。印伝がファッションとして、常に時代の最先端というべきデザインセンスが求められていることに、作り手も敏感であったのである。これまでに蓄積された伊勢型紙による新旧の柄は膨大な数に及び、その時代時代の作り手の情熱が垣間見える。またデザインはもとより、素材の鹿革の入

手から染めや漆付けの工程まで、時代とともに変えていかなければならなかった。

昭和62年には、伝統的な原料と技法で地域に産地形成している工芸品として、国の「伝統的工芸品」に指定された。この頃はすでに、数社が集まって甲府印伝商工業協同組合が設立され、デザイン力の向上、メンテナンスや類似品への対応など、産地としての積極的な取り組みが始まっていた。この当時から問題は、専門的な技術の継承と後継者の育成であった。現在、日本で唯一の「甲州印伝の伝統工芸士」の資格を持つ「印傳の山本」の山本誠さんは、県産品をアピールするさまざまな会場に向きその技を披露している。

また、印伝業界の特色として、まだ「下など」という言葉を人々が聞き慣れない時



印傳屋上原勇七 甲府本店



「印傳の山本」伝統工芸士 山本 誠さん  
漆の濃度、気温、湿度に神経を使う漆付け。漆の盛り上がり、切れに長年の経験で生み出された技が光る。すべての条件がそろわないとすぐに漆が取れてしまうそうだ。

代から、東京や大阪の二等地にアンテナショップを開店させ、毎年、新しいデザインの手帳バッグを発表してきた。やまなしブランドのトップを走ってきたと言ってもいい。西洋伝統のアイテムに和のエッセンスが融合した印伝。最高級の気品を感じさせる逸品が作られている。伝統文化を現在に蘇らせ、世界の女性をわくわくさせるような製品が生み出される山梨ブランドは、これからも時代の息吹を感じさせる製法づくりに余念がない。

## 鹿革と漆が出会ったエキゾチックな美しさ

印伝の名は、「インデン」が変化したものと、また「印度伝来」に由来するとも言われる。今や山梨だけに受け継がれている、独自の技法での鹿革の工芸品である。その始まりは、戦国時代に武将たちの勇姿を飾った鎧や兜に用いられた技法―鹿革の丈夫でしなやかな手触りを生かし、藁と松やにを焼いてその煙でいぶす「燻べ（ふすべ）技法」―「色」ごとに型紙を替えて色を重ねる「更紗（さらさ）技法」などである。革工芸品の歴史は古く、古今東西に見られるが、これほど洗練された美しさは印伝だけだろう。やがて、海外から珍しい文物が流入した南蛮貿易の時代には、

技術の革新も進んでいった。そして、これまでの技法に、さまざまな工夫がされるようになっていった。

江戸時代、遠祖・上原勇七が鹿革に漆で模様を付ける技法を創案。「漆付け技法」は、鹿革と漆の優れた特性を調和させた甲州印伝独特の伝統技法。山国である甲州は、古くから鹿革や漆が産出され、「甲州印伝」が生まれる格好の地であった。このころの印伝は、粋でちょっと高価な工芸品であったが、巾着やたばこ入れ、革羽織りなど広く庶民にまで愛好された。模様は、「勝虫（かつむし）」と呼ばれ武士に好まれたトンプ柄が定番となった。有名な「東海道中

武具から発達した美しい革工芸

# 甲州印伝 INDEN

伝統的な鹿革工芸品でありながら、どこかエキゾチックな美しさを感じさせるのは、印伝の起源とされる戦国時代が、中国や東南アジアと盛んに交易し南蛮文化が渡来する時代であったからだろう。武具として多用された鹿革の印伝は、江戸時代になると巾着やたばこ入れなど粋で高価な工芸品として愛用された。やがて明治を迎えると丈夫で美しい信玄袋に発展した。今や斬新なデザインの高級ハンドバッグが、モダン和風の装いに欠かせないアイテムとして多くの女性に愛されている。

膝栗毛（とうかいどうちゅうひざくりげ）（十返舎九）の沼津のくだりには、「腰にさげたる印伝の巾着を出し見せる」と、旅銭を盗まれた弥次喜多のふたりが、茶屋で巾着を待たすに百文で売れる場面がある。印伝の巾着やたばこ入れなどが旅には欠かせない必需品になっていたことがうかがえる。

江戸時代後期になると、甲府には「印傳屋上原勇七」をはじめ三軒の印伝細工所があった。秘伝の技法は代々口伝（くでん）で継承され「印傳屋上原勇七」は現在で、13代を重ねている。

幕末の嘉永七年（1854）に建てられた「甲府買物独案内」には、甲府で一番繁華な八日町で繁盛する印伝屋の賑わいが紹介されている。



印傳屋上原勇七の甲府本店2Fにある「印傳博物館」。現存する印伝の名品が展示されている。



江戸時代の印伝のたばこ入れ。キセル、根付とも趣をこらした細工がしてある。

印伝の言葉が記された「東海道中膝栗毛」本中挿絵には旅人の腰にたばこ入れが見える。

